

## 「天から火を降らせる」

2015年07月20日

ルカによる福音書9章51節～56節。イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。そして、先に使いの者を出された。彼らは行って、イエスのために準備しようと、サマリア人の村に入った。しかし、村人はイエスを歓迎しなかった。イエスがエルサレムを目指して進んでおられたからである。弟子のヤコブとヨハネはそれを見て、「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言った。イエスは振り向いて二人を戒められた。そして、一行は別の村に行った。

主イエスのガリラヤでの「神の国」の宣教は民衆に圧倒的な支持を得た。生きることを喜び合う神の恵みのリアリティを与えたからである。民衆はいつも黒山のように主イエスに群がった。弟子たちは、このことを喜び、主イエスの弟子であることを誇りに思った。

主イエスは時が満ちたことを知られ、十字架で死ぬことを決意し、エルサレムに向かうとされた。ガリラヤからエルサレムに行くためにはサマリアを通らなければならない。サマリアはかつて同胞であったが、アッシリアに滅ぼされてから、アッシリアの宗教を受け入れ、ヤーウェに対する信仰をないがしろにした。ユダヤ人はサマリア人を不信仰な民族と軽蔑し、彼らとは口を利かない、サマリアを通ると汚れるとしていた。主イエスには、そのような思いはなく、サマリアを通って行こうとし、準備のために弟子たちを先に遣わした。主イエスがサマリアに入ると、サマリア人は歓迎の意思を表さなかった。ルカ福音書は、主イエスは真っ直ぐにエルサレムを目指し、サマリアでは言葉も語らず、いやしの奇跡も行わなかったからであると説明している。ヤコブとヨハネ兄弟は、ガリラヤとは全く違うサマリア人の主イエスを無視する態度に激怒した。主イエスに「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と語りかけた。彼らはガリラヤと同じように、歓喜を込めて迎えるべきだと思っていたからである。この言葉に、彼らがどれほど主イエスを愛し、尊敬していたかが分かる。

ヤコブとヨハネ兄弟の言葉は、旧約聖書の列王記下1章の故事にある。アハズヤ王は部屋の上から落ちて病気になった。王は異教のエクロンの神バアル・ゼブブに病気が治るかどうかを問わせた。異教の神に問う王に、預言者エリヤはイスラエルには神はいないのかと怒った。王は50人の部下を連れて五十人隊長を遣わし、エリヤを呼ばせた。エリヤは「天から火が降って来て、あなたと50人の部下を焼き尽くすだろう」と拒絶する。すると、天から火が降って来て、彼らは皆焼き尽くされた。そういうことが二度起こり、三度目に懇願する隊長を赦し、エリヤは王のもとへ行くと記している。

ヤコブとヨハネはエリヤの故事にあるように、歓迎しないサマリア人を焼き滅ぼしようと言った訳である。兄弟は、主イエスから「ボアネルゲス（雷の子）」とあだ名がつけられたように、自分に気に入らないことがあると、すぐに怒り出す短気な人柄であった。それにしても、あまりに激しい言葉である。「イエスは振り向いて二人を戒められた」と書かれている。兄弟は、主イエスの「敵を愛しなさい、人を裁くな」という御言葉を全く聞いていない。サマリア人は敵でなく、歓迎しなかっただけである。彼らは、十字架の死において罪を赦される主イエスの決意など知るすべもなかった。

誰がいちばん偉いかと論争する弟子たち、仲間でないからと言って排除するヨハネ、天から火を降らせて焼き滅ぼしようと言うヤコブとヨハネ等々。福音書は弟子たちの無理解と偏狭さを正直に伝え、無知と弱さをさらけ出した姿を描いている。